

「身体表現論」の授業に対する受講生の自由記述回答の内容分析 —スポーツとダンスの特性と結びつき—

幅田彩加（平成国際大学）・村田芳子（平成国際大学）

1. はじめに

平成29年度に新設されたH大学のスポーツ健康学部では「高いコミュニケーション能力を有した指導者」の育成を特徴として掲げており、学部必修のコミュニケーション関連科目の一つとして「身体表現論」の授業が平成30年度より開講されている。この授業では、「身体表現」というくくりからダンスとスポーツを捉え、両者の新たな関係性を探っていくことをテーマとしている。このような視点で行われる本授業に対して受講生はどのような反応を示し、気づきを得るのか。

そこで本研究では、本授業の最終課題レポートとして収集した自由記述回答を、テキストマイニングの手法を用いて単語の使用傾向などを分析し、受講学生の授業内容に対する反応の傾向を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

(1) 調査対象と授業概要

2018年度春学期H大学スポーツ健康学部において2年生対象に開講された「身体表現論」（全15回）の受講生37名を対象に、授業の最終課題レポートにて自由記述回答の調査を行った。提出したのは対象学生37名のうち35名。受講者には論文や報告書などで公表することがある旨を説明し、口頭にて同意を得て研究に用いた。

調査対象とした授業の主導は第二著者・村田が行い、第一著者・幅田が授業補助と記録を行いながら進行した。毎回の授業前半では、身体表現及びダンスを窓口に、様々な観点からダンスとスポーツの関わりについて講義を行い、後半は講義に関わる課題を基にグループでのディスカッションを基盤とした主体的で双方向的な活動を取り入れた授業が展開された。

(2) 調査内容

最終課題レポートにおける設問1「この講義の全体の内容を通して、先生の話や映像のなどの中で、特に印象に残っている言葉を3~5つあげてその理由や自分の考えを書いてください。配布した授業記録を参考にすること。」の自由記述回答(A4サイズ1ページ)を分析に使用した。

3. 分析方法

収集した自由記述回答をテキストマイニングの手法を用いて、使用されている単語を抽出し、使用頻度を明らかにした。

また、それぞれの抽出語の関係性について共起ネットワークを用いて分析を行った。そして、単語の使用傾向などから、学生の授業内容に対する反応傾向について考察を行った。

4. 分析結果と考察

(1) テキストデータの概要

データファイルの概要は表1の通りである。抽出語は全部で1221語あり、その出現回数の平均値は4.42回であった。出現回数4までの累積パーセントは81.80%であったため、抽出語全体の約80%は出現回数が4回以内である。

表1 回答のデータファイル概要

延べ回答件数	35
文の数	430
総語数(使用)	10,622(4,128)
異なり語数	934
出現回数の平均	4.42
出現回数の標準偏差	13.37

(2) 語彙の出現頻度

出現頻出が飛び抜けて最も多かった単語は「ダンス」(202回)である。本授業では、ダンスを窓口としてスポーツとの関わりや身体表現を

考えていく為、授業でダンスの多様な要素を取り扱ったことが原因だと思われる。次に多かったのは「身体」(123回)であり、その他の名詞についていえば「表現」(85回)「スポーツ」(53回)等、授業を通してのキーワードが頻出しているが、そこに並んで「リズム」が53回と高い数値になっている。受講生はスポーツとの関わりを考える際、様々なダンスの要素の中でも特に「リズム」に対して大きな反応を示したといえる。

(3) 語彙の共起関係

抽出した語同士の関連を確かめる為に、共起ネットワークにて分析を行った。樋口(2017)に寄れば、語句がデータ中でよく一緒に使用されることを「共起する」と言い、共起することは、その記述された語句同士が互いに強く関連していることを指している。

結果は図1の通りである。最も多く頻出した単語「ダンス」(202回)を省く為に最大出現数を200で設定した。それによって、ダンスの多様な要素を受講者がスポーツとどのように結びつけているかの傾向をみることができると考えた。

結果の図は、出現回数は円の大きさに比例しており、共起性・関連性の強さは接続されている線の太さに比例して表されている。

更に、接続する線から各語の関連性を考察してみると、「スポーツ」と「表現」が接続する間に「出来る」があることから、スポーツにおける身体表現の可能性への反応傾向が高いことが分かる。また、「スポーツ」と「出来る」には、「印象」と「残る」が強く共起しており、設問1の「この授業で最も印象に残った内容は何か」の質問に対して、スポーツで出来ること、つまりスポーツの可能性について回答する傾向がみられたといえる。

最も大きい円の「身体」と「思う」に着目すると、そこに結びつく「言葉」という単語は、振

付家ピナバウシュの踊る理由として授業内で紹介した『言葉』にできないものがある、『言葉』にしたくないものがある」や「ダンスは『言葉』が生まれる以前からあった人類最古の文化」の文章から多く抽出されており、同じように接続している「踊る」は「人は本来『踊る』存在」という表現で多く用いられていたことにより、身体表現の始まりに関して思うことが多かったと考察できる。「身体」の単語は「コミュニケーション」とも接続しており、身体的コミュニケーション、つまりノンバーバルコミュニケーションについて「初めて」「知る」ことが多かったことも読み取れる。

5. まとめ

本授業の受講生は、スポーツを身体表現として捉える視点への反応は高く、ダンスを窓口身体表現の始まりや多様性に触れることで、ダンスとスポーツの結びつきについて新たな気づきを得たことが明らかになった。

※本研究は、平成31年度平成国際大学共同研究「大学生の運動能力とコミュニケーション能力向上のための効果測定～縦断的研究による要因分析～」の一環として実施されたものである。

※引用・参考文献は紙面の都合上割愛させて頂く。

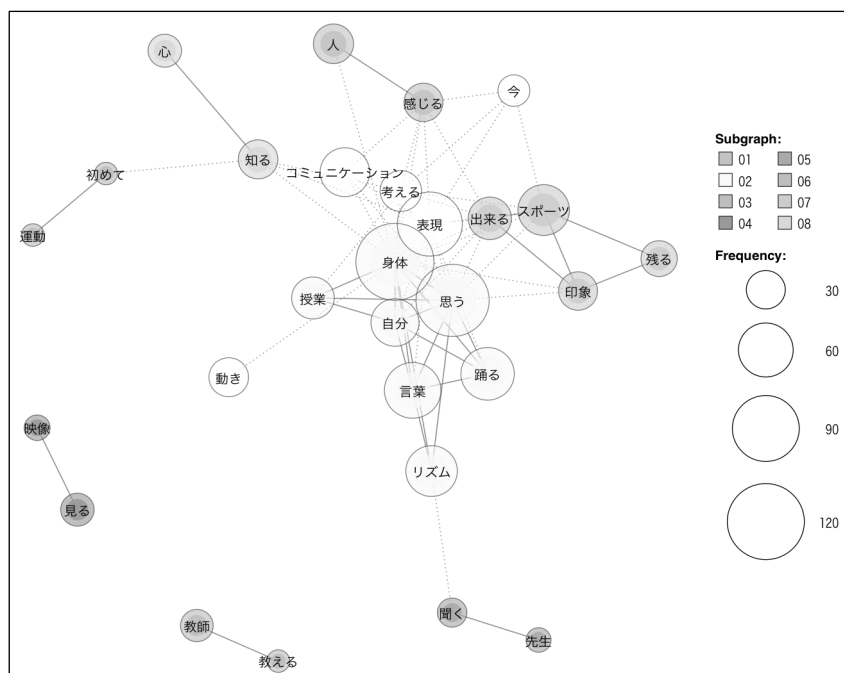


図1 抽出語の共起ネットワーク